

DATA FILE



単斜晶系

名 前	KUNZITE (クンツァイト) / クンツァイト
化学組成	$\text{LiAlSi}_2\text{O}_6$
色	紫色、ピンク色
光 沢	ガラス光沢
蛍 光	なし (一部のものにはある)
条 痕	白色
劈 開	完全
断 口	不規則
硬 度	6.5 ~ 7
比 重	3.0 ~ 3.2

クンツァイト

KUNZITE

透明度の高いピンク色や紫色をしたリシア輝石の宝石名を「クンツァイト」という。

マダガスカルで産出したクンツァイトの結晶。

長石、石英、白雲母、電気石などと共生する。

結晶を火にかざすと赤色の炎色反応を示す。

素焼きの陶板にこすりつけると白色の条痕が残る。

劈開は完全で、ハンマーでたたくと不規則な断口があらわれる。



ロシア輝石の宝石名

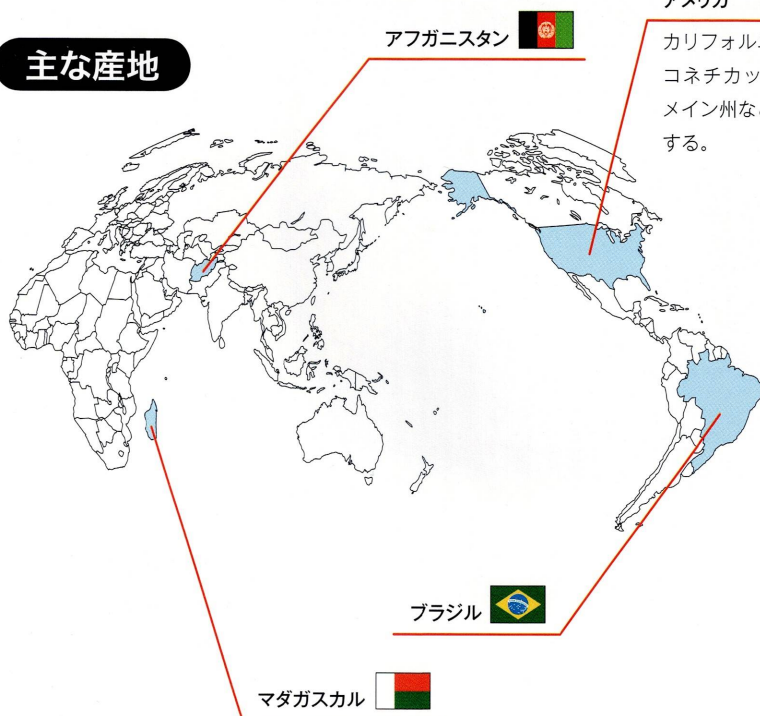
ク ン ツ ア イ ト

「クンツァイト」とは、アメリカの宝石学者ジョージ・F・クンツ（1856～1932年）にちなんで名づけられた名称で、透明でピンク色や紫色をしたロシア輝石の宝石名として用いられる。ブラジルの奥地で発見された大きく質の良い結晶のひとつには880カラットのものがあり、アメリカのスミソニアン博物館に展示されている。また、アメリカのカリフォルニア州パラでは、約2.2キロの母岩についたクンツァイトが発見され、ハーバード大学の鉱物コレクションに加わっている。結晶の色合いは、包有物として含むマンガンによるもので、マンガンの含有量が多くなるほど色が濃くなるのが特徴。しかし、多量にマンガンを含むものは色が濃くなり過ぎて不透明になるため、宝石としての価値は低い。なお、日本では現在のところ、クンツァイトに分類されるような色のロシア輝石は見つかっていない。

色の変化

クンツァイトは、炎の中に入れると赤色の炎色反応を示す。また、紫外線ランプのもとに置かれると黄色やオレンジ色に見えるものが存在。100～250℃で熱すると本来の色より明るい色に変化する場合があり、放射線を照射すると緑色に変化する。しかし、いずれの場合も、時間が経つと元の色に戻ってしまう。

主な産地



▲正長石にともなって産出したクンツァイトの柱状結晶。アフガニスタン産。



▶ドロップ・カットのクンツァイト。



▲カッティングが施されたクンツァイト。ブラジル産。